弘前大学教育学部紀要　第107号：95～100（2012年３月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 107：95～100（Mar. 2012）

保健室の利用状況と保健室観・養護教諭観の関連
～小・中・高校時代の経験に基づいて～

Relationship between Use Patterns and Images of School Health Room (SHR) among Yogo Teachers among University Students
～ Based on Experiences in Elementary, Junior and Senior High School Periods ～

久野　真澄*・遠山　彩香**・小林　央美***・田中　勝則***
Masumi HISANO*・Ayaka TOYAMA**・Hiromi KOBAYASHI***・Masanori TANAKA***

要　旨

養護教諭の活動の中心である保健室には，様々な身体症状や問題を抱えた児童生徒が来室する。児童生徒の小さな変化や問題に気づくために，普段から来室しやすい保健室の雰囲気作りを行っていくことも養護教諭の重要な職務の一つであると考える。本研究では，大学生及び大学院生を対象に質問紙調査を実施し，児童生徒期の保健室利用状況と保健室観・養護教諭観との関連を明らかにすることで，来室しやすい保健室経営についての示唆を得ることを目的とした。その結果，保健室の利用状況，特に救急処置以外で来室した経験が，「落ち着く」「相談する場」「来室しやすい」といった保健室観や，「共感してくれる」「話に耳を傾けてくれる」「安心感がある」といった養護教諭観と関連していることが明らかとなった。

キーワード：保健室観，養護教諭観，保健室利用状況

Ⅰ．はじめに

養護教諭は，学校保健活動の推進に当たって中核的な役割を果たしており，現代的な健康課題の解決に向けて重要な責務を担っている[1)]。養護教諭の活動の中心である保健室には，様々な身体症状や問題を抱えた児童生徒が来室する。養護教諭は「児童の養護をつかさどる」教員であるという特質を生かし，心身の健康問題の早期発見・対応や健康の保持増進を行うことが求められている。普段の関わりの中で児童生徒の様子を観察することにより，よりすばやく小さな変化や問題に気づき，その後の充実した対応を行うことができるのではないかと考える。そのために，児童生徒が普段から来室しやすい保健室の雰囲気作りを行っていくことも養護教諭の重要な職務の一つであると考える。

児童生徒の健康づくりを効果的に推進するためには，学校保健活動のセンター的役割を果たしている保健室の経営の充実を図ることが求められている[2)]。保健室の設置目的として，学校保健安全法第７条において「健康診断，健康相談，保健指導，救急処置その他の保健に関する措置を行うため」と示されているが，実際にはそれ以外の目的で来室する児童生徒も多い[3)]。高橋・大谷らの研究によると，救急処置以外で訪室した生徒数は救急処置を目的として訪室する生徒数の倍近くとなっており，保健室の設備・備品の利用や養護教諭との関わり，保健室という空間の利用，友人との関わりを目的としていることが明らかとなった[4)]としている。このことから，救急処置における対応だけではなく，普段の何気ない児童生徒と養護教諭との関わりが保健室の利用状況や養護教諭観・保健室観に大きな影響を及ぼしているのではないかと考える。

そこで，本研究では，児童生徒期の保健室利用状況と保健室観・養護教諭観との関連を明らかにすること

＊　弘前大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Hirosaki University
＊＊　新潟市立新飯田小学校
Niida Elementary School, Niigata city
＊＊＊弘前大学教育学部教育保健講座
Department of School Health Science, Faculty of Education, Hirosaki University

で，来室しやすい保健室経営についての示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象

大学生及び大学院生300名を対象とした。回収率は79.3%（238名），有効回答数は230名（男子76名，女子154名），有効回答率は96.6% であった。

２．調査期間

平成22年10月から同年11月までであった。

３．調査方法

選択肢式と一部自由記述式を併用した質問紙を用い，直接及び間接配布法により行った。

４．調査内容

対象者の属性（学部，学年，性別等）と児童生徒期の保健室利用状況，及び，児童生徒期の保健室観・養護教諭観について回答を求めた。

５．分析方法

分析には統計ソフト SPSS 16.0 J for Windows を用いた。

児童生徒期の保健室観・養護教諭観は項目ごとに４件法で回答を求め，「とてもそう思う」を４点，「ややそう思う」を３点，「あまりそう思わない」を２点，「ほとんどそう思わない」を１点として得点化した。児童生徒期の保健室利用状況により「ほとんど行ったことがない（以下，利用無群）」「救急処置でのみ行った（以下，救急処置のみ群）」「救急処置以外にも行った（以下，利用有群）」に群分けを行った。

検定は，χ^2検定と，児童生徒期の保健室利用状況を独立変数とし，保健室観及び養護教諭観を従属変数とした１要因の分散分析を行った。有意水準は５％に設定した。

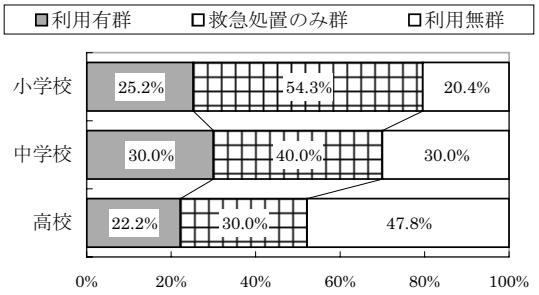
Ⅲ．結果と考察

１．児童生徒期の保健室利用状況について

対象者の児童生徒期の保健室利用状況の割合を図１に示した。

校種が上がるにつれて「利用無群」の割合が増加しており，小学校と高校では27.4% の差がみられた。「利用有群」については，校種間で児童生徒期の保健室利用状況に大きな差がみられなかった。このことから，小学校時代から救急処置以外にも保健室を利用していた者は，中学校，高校と校種が上がっても，保健室や養護教諭を身近に感じ，継続して保健室を利用していたことがうかがえる。

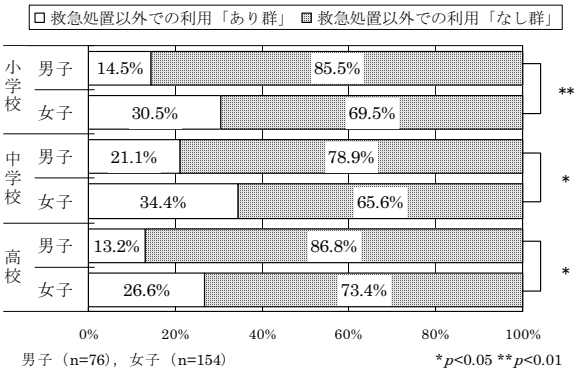
図１　児童生徒期の保健室利用状況の割合



２．男女別にみた児童生徒期の保健室利用状況について

児童生徒期の保健室利用状況について，「利用有群」を救急処置以外での利用「あり群」，「利用無群」と「救急処置のみ群」を救急処置以外での利用「なし群」として，性別とクロス集計し，χ^2検定を行った。その結果を図２に示した。

図２　男女別にみた児童生徒期の保健室利用状況



どの校種においても，女子の方が男子よりも，救急処置以外での利用「あり群」の割合が有意に高かった。小・中学生を対象とした浅川ら[5]の研究で，女子の方が男子よりも養護教諭や保健室に対して安堵感や親和性のイメージが高いことが明らかにされている。女子の方が同性の養護教諭に対して接しやすさ，親しみやすさを感じることによって，救急処置以外での保健室の利用につながっていたのではないかと考えられる。

一方で，「救急処置のみ群」に着目して男女差を比較したところ，どの校種においても有意差がみられなかったことから，男子に対しても保健室は救急処置の場として機能していたことが分かった。平等な対応を心がけながらも，普段に接する機会の少ない児童生徒に対しては，救急処置の場面や校内での観察を大切に行っていくことが重要なのではないかと考える。

３．児童生徒期の保健室利用状況別にみた保健室観について

児童生徒期の保健室利用状況を独立変数とし，保健室観の項目を従属変数とした一要因の分散分析を行った（表１）。その結果，すべての校種において，児童生徒期の保健室利用状況と保健室観の「相談する場」「落ち着く」「気軽におしゃべりできる」「人が大勢いる」「用がないと行けない」「誰でも入れる」の項目において有意差がみられた。小学校においては，６項目に加えて「静か」の項目においても有意差がみられた。

有意差がみられた項目に関して，Tukey 法による多重比較を行ったところ，「落ち着く」の項目において，すべての校種で，「利用有群」，「救急処置のみ群」，「利用無群」の順で有意に得点が高くなっていた。高橋・大谷[6]は，『救急処置以外の目的で保健室を訪室する生徒の中には，「保健室」を「学校における自分の居場所」として，安心感や受容感・教室からの開放感を味わうために訪室している者もいる』としている。「利用有群」ほど保健室で安心感や受容感などを得られる経験をし，より「落ち着く」と感じていたのではないかと考える。

「用がないと行けない」の項目では，小・中学校において「利用無群」，「救急処置のみ群」，「利用有群」の順で有意に得点が高くなっていた。高校においては，「利用無群」と「救急処置のみ群」の間では差がみられなかったものの，利用有群と「利用無群」，「救急処置のみ群」の間で「利用有群」の得点が有意に低くなっていた。また，「誰でも入れる」の項目において，「利用有群」は他の２群に比べて得点が有意に高かったことから，「利用有群」ほど保健室に行きやすいというイメージを持っていたといえる。「いつでも，誰でも，どのような理由でも来室することができる場」という認識を児童生徒が持つために，養護教諭としての対応も大切であるが，保健室の利用や機能について，他教師との共通理解や協力も必要となってくるのではないかと考える。

「気軽におしゃべりできる」「人が大勢いる」の項目において，「利用有群」が他の２群に比べ有意に得点が高くなっているにも関わらず，「静か」の項目が，小学校を除き３群間でほとんど得点に差がみられなかった。「利用有群」は保健室を，おしゃべりをすることができる場だと認識しつつも，他の利用者や体調不良の児童生徒がいる場合には，静かにする場でもあるという認識を持っていたのではないかと考えられる。つまり，「利用有群」ほど，保健室は体調不良や問題を抱えた児童生徒が来室する場でありながらも，人と交流する場でもあるという認識を持ち，それらの機能を場合によって使い分けることが出来ていたのではないかと考察できる。

「救急処置の場」「身体測定の場」「清潔」「いつも養護教諭がいる」の項目については，どの校種においても高い得点を示したものの，児童生徒期の保健室利用状況の3群間で得点に有意差がみられなかった。これらの項目については，児童生徒期の保健室利用状況に関わらず保健室観として一般化していると推察されることから，得点に差がみられなかったと考えられる。

４．児童生徒期の保健室利用状況別にみた養護教諭観について

保健室観と同様，児童生徒期の保健室利用状況を独立変数とし，養護教諭観の項目を従属変数とした一要因の分散分析を行った（表２）。その結果，すべての校種において，児童生徒期の保健室利用状況と養護教諭観の「相談にのってくれる」「話に耳を傾けてくれる」「共感してくれる」「励ましてくれる」「助言してくれる」「信じてくれる」「安心感がある」「いつも笑顔である」「優しい」「保健室以外でも接する」の項目において有意差がみられた。小・中学校ではさらに「公平である」，中・高校では「叱ってくれる」の項目で有意差がみられた。

有意差が認められた項目に関して，Tukey 法による多重比較を行ったところ，ほとんどの項目で「利用有群」の得点が他の２群に比べて有意に高くなった。救急処置以外での保健室利用経験があるほど，養護教諭に対して信頼感や安心感を持ち，共感や助言，傾聴してもらったと感じていたのではないかと推察される。このことから，普段からの児童生徒に対する何気ない関わりを大切にすることが重要であると考える。そのことにより，保健室が児童生徒にとって身近で多機能的な場となることが期待される。

「救急処置のみ群」に着目し，「利用無群」と有意差があり，「利用有群」と差のない項目をみてみると，中学校においては「信じてくれる」「いつも笑顔である」「叱ってくれる」，中・高校では「励ましてくれる」「優しい」の項目が挙がった。これらの項目については，「救急処置のみ群」と「利用有群」との差がみられなかったことから，救急処置時の養護教諭の対応によって，「利用有群」と同等に児童生徒期の養護教諭観として印象に残っていたと考えられる。つま

表１　項目別にみた児童生徒期の保健室利用状況と保健室観

		利用有群		救急処置のみ群		利用無群		F 値	多重比較
		平均	SD	平均	SD	平均	SD		
a. 救急処置の場	小学校	3.79	0.45	3.78	0.43	3.74	0.44	0.18	
	中学校	3.77	0.46	3.78	0.41	3.71	0.67	0.42	
	高等学校	3.73	0.45	3.75	0.47	3.66	0.53	0.76	
b. 身体測定の場	小学校	3.14	0.91	3.07	0.78	3.00	0.93	0.34	
	中学校	3.12	0.85	2.99	0.93	2.81	0.84	2.08	
	高等学校	2.75	0.93	2.64	1.01	2.79	0.92	0.55	
c. 相談する場	小学校	2.95	0.83	2.41	0.83	2.36	0.92	9.23 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.17	0.91	2.80	0.89	2.61	0.89	7.10 **	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.37	0.80	2.81	1.00	2.44	0.93	17.90 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
d. 清潔	小学校	3.66	0.55	3.56	0.61	3.60	0.54	0.53	
	中学校	3.62	0.55	3.58	0.58	3.54	0.56	0.41	
	高等学校	3.63	0.56	3.61	0.55	3.56	0.55	21.82	
e. 落ち着く	小学校	3.22	0.80	2.87	0.79	2.51	0.80	10.48 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.19	0.73	2.85	0.78	2.41	0.86	16.88 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.29	0.70	2.91	0.85	2.43	0.82	21.88 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
f. 静か	小学校	2.74	0.83	2.89	0.82	3.17	0.79	3.70 *	利用有群＜利用無群
	中学校	2.74	0.76	2.88	0.80	3.03	0.80	2.34	
	高等学校	3.14	0.85	3.25	0.76	3.34	0.71	1.24	
g. 気軽におしゃべりできる	小学校	3.07	0.97	2.56	0.96	2.26	0.94	9.96 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.16	0.88	2.54	0.86	2.14	0.90	23.50 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	2.94	0.99	2.26	0.93	2.05	0.88	16.37 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
h. 人が大勢いる	小学校	2.24	1.01	1.84	0.83	1.72	0.90	5.40 **	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	2.36	1.03	2.09	1.04	1.75	0.79	6.80 **	利用無群＜利用有群
	高等学校	2.12	0.91	1.78	0.86	1.60	0.67	7.61 **	利用無群＜利用有群
i. 用がないと行けない	小学校	1.91	0.96	2.62	0.89	3.06	0.87	22.30 ***	利用有群＜救急処置のみ群＜利用無群
	中学校	1.80	0.81	2.45	0.91	2.71	0.94	19.41 ***	利用有群＜救急処置のみ群＜利用無群
	高等学校	2.02	0.97	2.72	0.97	2.88	0.92	14.90 ***	利用有群＜利用無群，利用有群＜救急処置のみ群
j. 誰でも入れる	小学校	3.45	0.80	2.82	0.87	2.60	1.04	14.03 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.38	0.77	2.89	0.79	2.52	0.92	18.69 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.06	0.95	2.72	0.92	2.51	0.94	6.08 **	利用無群＜利用有群
k. いつも養護教諭がいる	小学校	3.41	0.59	3.41	0.71	3.17	0.76	2.24	
	中学校	3.38	0.62	3.23	0.76	3.17	0.82	1.41	
	高等学校	3.12	0.82	3.28	0.82	3.07	0.80	1.36	

小学校：利用有群(n=58)，救急処置のみ群(n=125)，利用無群(n=47)
中学校：利用有群(n=69)，救急処置のみ群(n=92)，利用無群(n=69)
高校：利用有群(n=51)，救急処置のみ群(n=69)，利用無群(n=110)

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001 df=2,227

り，救急処置のみで利用した児童生徒に対しても，関わり方次第で，養護教諭をより身近に感じ，利用しやすい保健室へと認識させることができるのではないかと考察できる。

「救急処置をしてくれる」「いつも保健室にいる」「いつも忙しそう」の項目は，どの校種においても児童生徒期の保健室利用状況の3群間で得点に有意差がみられなかった。「救急処置をしてくれる」「いつも保健室にいる」の項目は得点が高いことから，保健室観と同様に，児童生徒期の保健室利用状況に関わらず養護教諭観として定着していたと考えられる。

前述した通り，保健室観における「いつも養護教諭がいる」，養護教諭観における「いつも保健室にいる」の項目について，どの校種においても児童生徒期の保健室利用状況別に得点に有意差がみられなかった。その一方で，養護教諭観の「保健室以外でも接する」の項目では，「利用有群」の得点が他の２群に比べて有意に高くなっていた。「利用有群」ほど普段から養護教諭と保健室だけでなく，保健室以外でも関わっていたことが分かる。養護教諭はこの機会を大切にすることで，児童生徒の保健室以外での様子を観察することができ，小さな変化や問題を発見するきっかけになるのではないかと考える。また，あまり保健室を利用しない児童生徒に対しても，保健室以外での関わりをすることで養護教諭に親しみを持つことができれば，保健室を利用するきっかけとすることができるのではないかと考えられる。

５．児童生徒期の保健室利用状況別にみた保健室観・養護教諭観の相談に関する項目について

保健室観・養護教諭観の相談に関する項目について多重比較を行った結果を表３に示した。小中学校では「救急処置のみ群」と「利用無群」で差がみられなかったが，高校では「利用有群」，「救急処置のみ群」，「利用無群」の順で有意に得点が高くなっていた。校種ごとに平均得点をみてみると，「利用有群」では小・中・高校と校種が上がるにつれて得点が高くなっており，「利用無群」ではほとんど変化がみられなかった。以上のことから，保健室における相談的機能は，養護教諭や保健室により接していくほど認識され，活用されていくと考えられる。

表２　項目別にみた児童生徒期の保健室利用状況と養護教諭観

		利用有群		救急処置のみ群		利用無群		*F* 値	多重比較
		平均	SD	平均	SD	平均	SD		
a. 救急処置してくれる	小学校	3.71	0.46	3.73	0.48	3.70	0.51	0.07	
	中学校	3.71	0.49	3.70	0.55	3.57	0.63	1.46	
	高等学校	3.78	0.42	3.61	0.57	3.61	0.59	2.00	
b. 相談にのってくれる	小学校	3.28	0.93	2.62	0.96	2.34	0.92	14.40 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.33	0.80	2.93	0.94	2.67	0.83	10.38 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.41	0.73	2.93	0.96	2.54	0.95	16.47 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
c. 話に耳を傾けてくれる	小学校	3.71	0.46	3.10	0.77	3.00	0.63	19.78 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.51	0.63	3.16	0.79	2.93	0.81	10.39 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.43	0.70	3.14	0.73	2.89	0.83	8.79 ***	利用無群＜利用有群
d. 共感してくれる	小学校	3.26	0.69	2.78	0.79	2.51	0.83	13.11 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.19	0.77	2.83	0.85	2.71	0.82	6.52 **	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.22	0.73	2.77	0.73	2.63	0.83	9.96 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
e. 励ましてくれる	小学校	3.36	0.61	2.86	0.77	2.70	0.69	13.47 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.25	0.72	3.05	0.65	2.71	0.82	9.71 ***	利用無群＜利用有群，利用無群＜救急処置のみ群
	高等学校	3.25	0.74	2.94	0.68	2.61	0.81	13.22 ***	利用無群＜利用有群，利用無群＜救急処置のみ群
f. 助言してくれる	小学校	3.10	0.69	2.84	0.76	2.55	0.85	6.78 **	利用無群＜利用有群
	中学校	3.28	0.64	2.93	0.69	2.71	0.79	11.20 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.39	0.67	2.99	0.72	2.61	0.85	18.59 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
g. 信じてくれる	小学校	3.17	0.68	2.76	0.81	2.43	0.77	12.51 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	2.91	0.82	2.74	0.80	2.32	0.85	9.71 ***	利用無群＜利用有群，利用無群＜救急処置のみ群
	高等学校	3.16	0.76	2.71	0.79	2.40	0.83	1.77 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
h. 安心感がある	小学校	3.67	0.51	3.22	0.80	2.79	1.00	16.68 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.33	0.74	3.08	0.90	2.84	0.80	6.14 **	利用無群＜利用有群
	高等学校	3.43	0.67	2.97	0.79	2.71	0.89	13.69 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
i. 公平である	小学校	3.45	0.65	3.03	0.80	2.94	0.82	7.40 **	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.29	0.71	2.91	0.89	2.94	0.84	4.74 **	救急処置のみ群＜利用無群，救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	3.08	0.82	3.10	0.71	2.95	0.84	0.86	
j. いつも笑顔である	小学校	3.52	0.57	3.18	0.85	2.94	0.82	7.44 **	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.25	0.83	3.15	0.78	2.71	0.84	8.72 ***	利用無群＜利用有群，利用無群＜救急処置のみ群
	高等学校	3.27	0.87	2.72	0.87	2.65	0.90	8.99 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
k. 叱ってくれる	小学校	2.47	0.90	2.42	0.95	2.15	0.83	1.89	
	中学校	2.52	0.98	2.50	0.88	2.13	0.80	4.38 **	利用無群＜利用有群，利用無群＜救急処置のみ群
	高等学校	2.55	0.99	2.48	0.83	2.17	0.83	4.37 **	利用無群＜利用有群
l. いつも忙しそう	小学校	2.21	0.81	2.20	0.81	2.17	0.76	0.03	
	中学校	2.20	0.85	2.39	0.88	2.25	0.77	1.14	
	高等学校	2.33	0.91	2.36	0.89	2.33	0.87	0.04	
m. 優しい	小学校	3.71	0.59	3.25	0.85	3.00	0.91	10.89 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.43	0.76	3.26	0.85	2.91	0.85	7.21 **	利用無群＜利用有群，利用無群＜救急処置のみ群
	高等学校	3.35	0.63	3.23	0.77	2.76	0.96	11.32 ***	利用無群＜利用有群，利用無群＜救急処置のみ群
n. いつも保健室にいる	小学校	3.26	0.58	3.12	0.80	3.09	0.72	0.93	
	中学校	3.19	0.62	3.07	0.80	2.97	0.82	1.43	
	高等学校	2.94	0.86	3.10	0.81	2.85	0.71	2.15	
o. 保健室以外でも接する	小学校	2.78	0.88	2.33	0.97	1.96	0.93	10.01 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	2.77	0.97	2.25	0.98	1.94	0.89	13.35 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高等学校	2.35	1.11	1.88	0.90	1.81	0.82	6.44 **	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群

小学校：利用有群(n=58)，救急処置のみ群(n=125)，利用無群(n=47)
中学校：利用有群(n=69)，救急処置のみ群(n=92)，利用無群(n=69)
高校：利用有群(n=51)，救急処置のみ群(n=69)，利用無群(n=110)

$^{*}p<0.05$ $^{**}p<0.01$ $^{***}p<0.001$　df=2,227

表３　児童生徒期の保健室利用状況別にみた相談に関する項目について

		利用有群		救急処置のみ群		利用無群		*F* 値	多重比較
		平均	SD	平均	SD	平均	SD		
相談する場（保健室観）	小学校	2.95	0.83	2.41	0.83	2.36	0.92	9.23 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.17	0.91	2.80	0.89	2.61	0.89	7.10 **	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高校	3.37	0.80	2.81	1.00	2.44	0.93	17.90 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群
相談にのってくれる（養護教諭観）	小学校	3.28	0.93	2.62	0.96	2.34	0.92	14.40 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	中学校	3.33	0.80	2.93	0.94	2.67	0.83	10.38 ***	利用無群＜利用有群，救急処置のみ群＜利用有群
	高校	3.41	0.73	2.93	0.96	2.54	0.95	16.47 ***	利用無群＜救急処置のみ群＜利用有群

小学校：利用有群(n=58)，救急処置のみ群(n=125)，利用無群(n=47)
中学校：利用有群(n=69)，救急処置のみ群(n=92)，利用無群(n=69)
高校：利用有群(n=51)，救急処置のみ群(n=69)，利用無群(n=110)

$^{*}p<0.05$ $^{**}p<0.01$ $^{***}p<0.001$　df=2,227

Ⅳ．まとめ

大学生及び大学院生230名を対象に，児童生徒期の保健室利用状況，及び，児童生徒期の保健室観・養護教諭観について調査し，以下の知見を得た。

1．児童生徒期の保健室利用状況では，校種が上がるほど「利用無群」の割合が増加していたが，「利用有群」については校種間であまり差がみられなかった。

2．男女別にみた児童生徒期の保健室利用状況では，どの校種においても，女子の方が男子よりも「利用有群」の割合が有意に高くなっていた。一方で，「救急処置のみ群」では男女間で差はみられなかった。

3．児童生徒期の保健室利用状況別に，保健室観に関する項目について分散分析及び多重比較を行った結果，すべての校種において「落ち着く」の項目が，「利用有群」，「救急処置のみ群」，「利用無群」の順で有意に得点が高くなった。「相談する場」「気軽におしゃべりできる」「人が大勢いる」「誰でも入れる」の項目では，校種間でばらつきはあるものの，「利用有群」の得点が有意に高くなっていた。「用がないと行けない」の項目では，「利用無群」の得点が有意に高くなった。

4．児童生徒期の保健室利用状況別に，養護教諭観に関する項目について分散分析及び多重比較を行った結果，「相談にのってくれる」「話に耳を傾けてくれる」「共感してくれる」「励ましてくれる」「助言してくれる」「信じてくれる」「安心感がある」「いつも笑顔である」「優しい」「保健室以外でも接する」の項目で「利用有群」の得点が有意に高くなった。

以上のことから，保健室の利用状況，特に救急処置以外で来室した経験が，「落ち着く」「相談する場」「来室しやすい」といった保健室観や，「共感してくれる」「話に耳を傾けてくれる」「安心感がある」といった養護教諭観と関連していることが明らかとなった。養護教諭が普段からの児童生徒に対する何気ない関わりを大切にすることで，児童生徒は保健室をより多機能的に，利用しやすいと捉えるようになることが考えられる。

謝　辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文　献

1）文部科学省：2009年１月17日，中央教育審議会答申「子どもの心身の健康を守り，安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について」，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/01/14/001_4.pdf，2011年１月20日
2）前掲書　1）
3）日本学校保健会：保健室利用状況に関する調査結果（平成18年度調査）
4）高橋雅恵・大谷尚子：生徒が救急処置以外の場面で保健室を来訪する意味と養護教諭の対応－ある小規模高校における訪状況の分析から－，学校健康相談研究 vol.5，No.2，2–14，2009
5）浅川潔司，高橋慶子，古川雅文：児童・生徒の学校適応水準が養護教諭及び保健室のイメージ形成に及ぼす影響，兵庫教育大学研究紀要第28巻，25–33，2006
6）前掲書　4）　14
7）阿部さやか：児童生徒の養護教諭観，弘前学校保健科学18，145–148，1999
8）大谷尚子：養護学概論第4版，東山書房，59-62，2006
9）小山美和：養護教諭の対応が児童・生徒の養護教諭観に及ぼす影響，弘前学校保健科学10，122–125，1991
10）鎌田庸子：生徒の養護教諭観－生徒が求める養護教諭の対応の側面から－，弘前学校保健科学20，145–148，2001
11）鎌田尚子：保健室頻回利用児の問題－小学生の場合－，学校保健研究17巻，314–316，1975
12）鈴木美智子：保健室頻回利用生徒の問題－中学生の場合－，学校保健研究17巻，317–319，1975
13）菊池優子：児童・生徒の養護教諭観，弘前学校保健科学12，154–157，1993
14）酒井都仁子，岡田加奈子，塚越潤：中学校保健室頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセスおよびその影響要因－修正版グラウンデッド・セオリーアプローチを用いた分析－，学校保健研究47，321–333，2005
15）竹俣由美子：新版・養護教諭執務のてびき第８版，東山書房，154–155，2009
16）千葉永子：生徒が望む養護教諭の相談的対応，弘前学校保健科学18，141–144，1999
17）三木とみ子：三訂養護概説，ぎょうせい，276–280，2007
18）山口美雪：養護教諭の相談的対応と生徒の養護教諭観，弘前学校保健科学16，145–148，1997
19）林檎美也子：児童生徒に対する養護教諭の相談的対応，弘前学校保健科学20，141-144，2001

（2012. 1.10　受理）